

独自の創業支援組織をつくり バイオベンチャーを連続起業

神戸医療産業都市構想の一翼を担う最先端研究拠点として、
世界展開を目指すスタートアップ企業を続々と立ち上げている。
経営のプロを招いた創業支援組織がエコシステムの中核だ。

神戸市は産学官連携により、21世紀の成長産業である医療関連企業の集積を図る「神戸医療産業都市」構想を推進している。

その中で神戸大学は、近年、大学内の研究シーズをもとにしたバイオテクノロジー分野のスタートアップ企業立ち上げに力を入れている。自己資金で事業を立ち上げて外部資金の調達につなげるまでの、起業において最もかじ取りが難しい時期を、独自の創業支援組織を中核とするエコシステムで支えているのが特徴だ。

まず2017年には、同大の教授らが開発したゲノム編集・合成技術を社会で役立てようと、3社を設立した。外部から遺伝子を入れることなくゲノム

改変ができる「切らないゲノム編集技術」を活用する株式会社バイオレット、大きなサイズのDNAを合成する「長鎖DNA合成技術」を活用する株式会社シンプロジェン、そしてバイオ医薬品におけるウイルス安全性評価を行うViSpot株式会社だ。また、19年には微細藻類を扱うアルジー・ネクサス株式会社も設立した。

神戸大学大学院科学技術イノベーション研究科長の近藤昭彦氏は「バイオテクノロジーと医療技術開発の融合が進んでいる。先端医療の拠点である神戸医療産業都市で、高度なバイオテクノロジーを持つ我々が事業化を進めることは意義がある」と語る。

しかし、大学の技術を事業化するこ

とは簡単なことではない。そこで神戸大学は、設立するスタートアップ企業の創業支援組織として株式会社科学技術アントレプレナーシップ(STE社)と、そこに投資する一般社団法人神戸大学科学技術アントレプレナーシップ基金(STE基金)を設立した。

「スタートアップ企業の経営戦略やファイナンスに通じた外部の人材を当研究科の教授として招き、大学院の教育に携わってもらいながら、STE社のメンバーとして事業化のスキームをつくってもらった」(近藤研究科長)。

STE社は、事業化の検討段階から一緒に会社をつくるスタンスで経営指導にも関わるシード・アクセラレーターとして機能する。STE社自身の活動資金は、民間企業に教育研修プログラムを有償提供することでまかなっており、必要以上の利益があれば、神戸大学へ

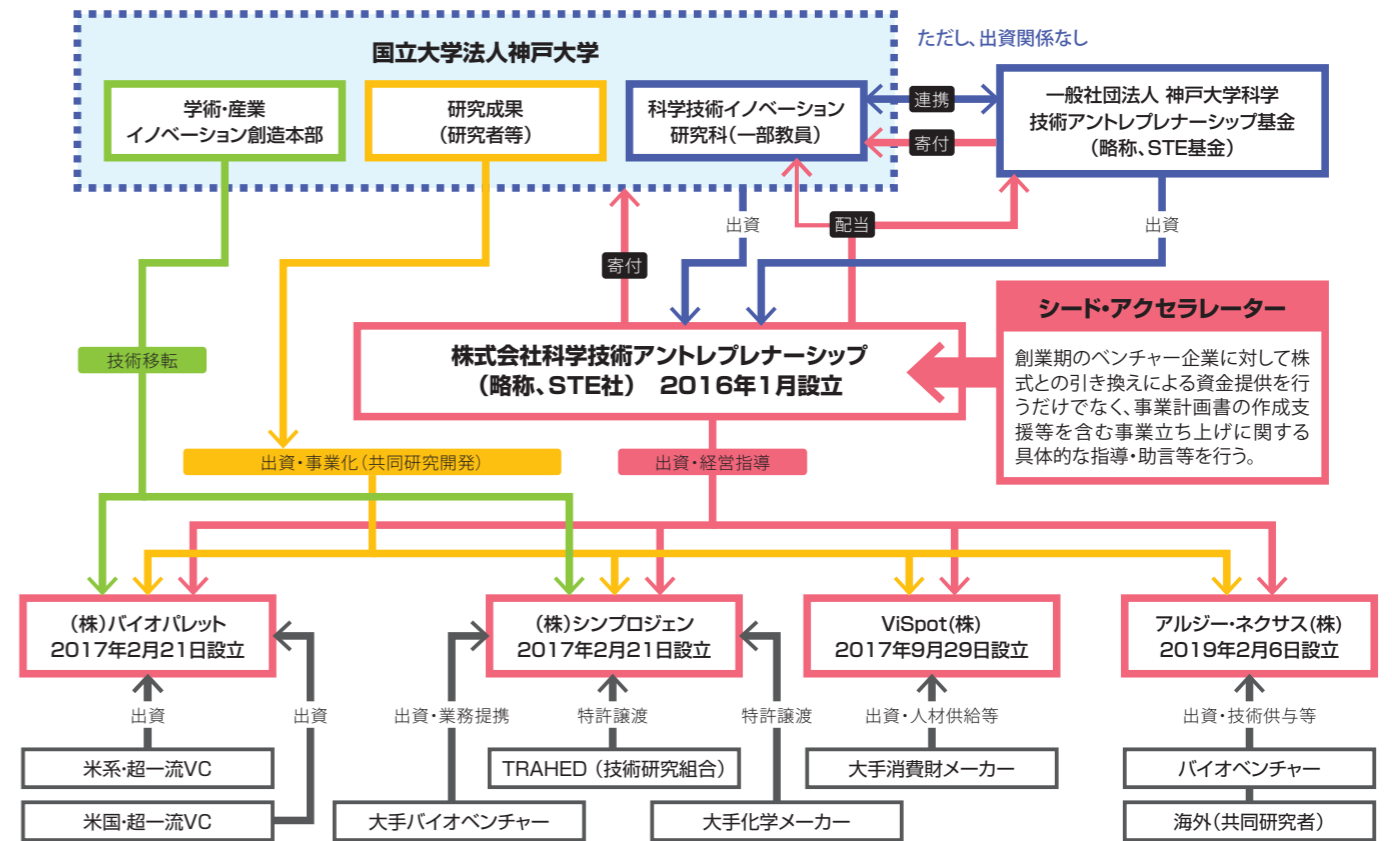


神戸大学・統合研究拠点では、産学官連携を視野に入れた最先端の研究が進められている



神戸大学・統合研究拠点は、神戸医療産業都市構想に関連する施設が集まる、神戸市ポートアイランド地区にある

神戸大学独自の創業支援組織を中心とするエコシステム(全体像)



ベンチャー企業の経営戦略やファイナンスに通じた外部の人材を招いて設立したSTE社が、スタートアップ企業の立ち上げを支援するのが独自の仕組み

寄附されるという。バイオテクノロジーのスタートアップ企業には、莫大な資金が必要となる。世界の主要な国で知的財産権を確保しなければならないからだ。大学だけではとても対応できない事業計画づくりや資金調達をSTE社が一手に担う。「特に知的財産権の確保はスピードが勝負。事業の戦略を立案し、グローバルなベンチャーキャピタルから大きな投資を呼び込むSTE社の役割は非常に大きい」(近藤研究科長)

優れた技術を持つ大学こそ 地域エコシステムの牽引役

同研究科では、既存の4社に続くスタートアップ企業の設立を今後さらに加速させていく計画だ。

「地域エコシステムに大事なことはクリティカルマス以上の企業数が集積していること。まずは、インパクトのある成功事例をできるだけ早く創出する

ことが必要だと考えている」と近藤研究科長。最終的には、世界をリードするグローバル企業を神戸市で誕生させることを目指している。

そうなれば、優秀な人材が集まり、地域に定住しながらバイオ関連のスキルを磨き、ステップアップすることも可能になって、新しいビジネスも次々と生まれる好循環ができる。最近、同研究科の学生がSTE社の支援によって起業を果たした例もあり、こうした事例をさらに増やしたい考えだ。

「学内にスタートアップ企業をつくりたいという空気が満ちていることが、エコシステム構築には必要だ。繰り返しチャレンジが起こる状況をつくるためには、起業のマインドセットを持った人材を増やしていくことが大事。当研究科はその役割も担う。優れた研究分野を持つ大学こそ、地域エコシステムの牽引役と捉え、貢献していきたい」(近藤研究科長)。



「スタートアップ企業にとって重要な知的財産権の確保に、STE社が果たす役割は大きい」と語る近藤昭彦神戸大学大学院科学技術イノベーション研究科長